

新しき中世(2)

之に先立ち紀元前二世紀ローマによる地中海世界の統一成り、帝政期においても若干の版圖擴大は見たれどもほぼ飽和の状態に達し、社會システムは概ね閉鎖系へ移行せり。その後ゲルマン民族の大移動の衝撃を受け政治體制の再編成は餘儀なくせられたるも基本的には壯大なる閉鎖系システムは維持せられたり。これ中世の歐州にして、帝政ローマの繼承システムと見るべきなり。

現代の世界を蔽ふシステムは後述の如く開放系のシステムなれど、そは中世歐州の近代化により發生せる開放系システムの周邊閉鎖系システムを吸収擴大する過程において實現せられたるものなり。されば我々の現今のシステムを理解せんとせば先づ中世歐州を觀察せざるべからず。

閉鎖系のシステムは政治、經濟、社會、宗教その他人類の營みのあらゆる局面において全體の立場より個の統制行はるるをその特徴とす。しかもその統制はトータルシステム、サブシステム、コンポーネントに至る多階層のヒエラルキーを通じて爲さるるを常とす。中世歐州の政治においては、頂點に皇帝あり。諸侯、貴族、平民を経て底邊の農奴に至る。宗教においては法王、大司教、司教、司祭、一般信徒の秩序あり。經濟、法制、社會、文化の各方面においても同種の秩序感覺の存するを見る。

かかる社會において價值觀もこれに對應して、秩序、權威、安定を以つて重しとなす。開放系において自由、平等、進歩を尊とぶと明らかなる對比をなすなり。更に進みて人間類型も閉鎖系と開放系においては著しく異にす。ホイジンガその「中世の秋」にて述ぶるが如く閉鎖系社會において個人存在感を示すことなし。余曾つてエチオピアに遊びし折、山中の道を車にて行くにいと淋しければ、人氣のなき所なりと言ふに、同乗の現地駐在員訝しげに果たして然るやと答ふ。改めて道のほとりをみれば土色の瘦せたる人々身じろぎもせず數多く坐り居たり。中世は歐州にても一般庶民はかく存在感なかりしならむ。かかる人々の存在感を示すは群集として同一の感情に驅らるる時のみなり。

同じき現象は昆蟲の世界にあり。蝗の大群發生して農地を始め大被害を及ぼすことは廣く知らる。この蝗普段は草色にして小型、飛翔距離も極めて限られたるも、一旦大發生して移動始むるや、色は黒色に變り、大型と成り、飛翔距離は比較を絶するに至る。曾つては昆蟲學者も別種のものと思ひたり。前者を定著相、後者を移動相と呼ぶ。

かかる閉鎖系システムは本來安定的なるも、微妙なる調和の上に築かれしものなるが故に外部よりの衝擊に弱く、僅かの衝擊にて機能不全に陥る。比較的少數の侵入者大なる害を及ぼすことを得。中國に於ける北方騎馬民族、インカ帝國におけるスペイン人、黒船の來航枚擧に違なし。閉鎖系における爲政者の最たる任務は外敵の侵入を防ぐにありし所以なり。

されど閉鎖系に取りて致命的なるは、飽和状態を保證せる境界の消失なり。